

第8節 言葉に対する感覚を豊かにする

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つに「言葉による伝え合い」が挙げられ、具体的な姿が示された。このことは、社会性や道徳性を育む上で重要であり、人間関係の基盤となる。また、自分の思いを伝えたり、相手の話を聞いたりすることは、他者と協力していくために不可欠である。

近年、情報機器の急激な発達や人との関わりの希薄さから、子供のコミュニケーションが不足していると言われている。自分のして欲しいことを自ら言葉で伝えることができる幼児、身振り手振りで伝えようとする幼児、声を掛けられるのを待っている幼児など様々な姿があり、言葉の理解や、表現方法には個人差が大きい。

この時期の幼児にとって、自分の話す言葉に対し、周囲の大人や友達が、うなずきながら聞いたり、共感したりする姿を見て、話すことの嬉しさを味わう経験が大切である。友達と一緒に遊びたい気持ちが、友達の話を聞こうとする意欲となり、聞く態度も身に付いていく。また絵本を見たり、素話を聞いたりする中でイメージを広げ、いろいろな言葉を知り、聞く力・話す力の育成につながっていく。

ここでは、3年保育5歳児の具体的な実践事例として、友達と絵本を通して言葉の面白さを感じている姿（事例1「今度は違うのを見つけよう」）、友達の話に耳を傾け相手に伝わるように話そうとする姿（事例2「ドキドキでウキウキだね」）を取り上げる。

（関連資料：「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成31年3月埼玉県教育委員会）P76～79）

1 幼児の実態（3年保育5歳児クラス 25名）

幼稚園に入園した頃は、「先生、これ読んで」と自分の好きな絵本を持ってきて、繰り返し読んでもらうことを喜んでいた。「びろーん」「どてっ」など、気に入った言葉を真似して言いながら手足を伸ばしたり、「どてっ」と転がったりして全身で表現していた。

4歳児になると、繰り返す言葉の響きやリズムを感じながら絵本を見たり、主人公になりきってごっこ遊びをしたりしていた。「私と『い』が一緒だね」と名前に同じ文字が入っていることに気付いたり、いろいろな言葉を思い浮かべ、友達としりとり遊びを行ったりしていた。

5歳児になると、絵本の中に出てくる言葉に関心をもち、初めて耳にした言葉の意味を質問してくることも多くなった。また、自分の名前を逆さから言ったり、「私は何でしょう」とクイズやなぞなぞを友達と出し合ったりしていた。

心動かされる共通の体験や日常の生活経験を繰り返し積み重ねていきながら、言葉に対する感覚が豊かになるように援助していきたい。

2 指導のねらい

- ・いろいろな言葉のやりとりや、言葉を使って遊ぶ楽しさを味わう。
- ・人の話をよく聞き、相手の思いや考えを理解しようとする。
- ・互いに意見を出し合ったり、受け入れたりしながら遊びを進めていく楽しさを味わ

う。

3 指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- ・先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (9)「言葉による伝え合い」]

- ・遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (8)「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」]

- ・友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

[幼稚園教育要領 第1章 第2の3 (3)「協同性」]

4 内容

- ・友達と一緒に、言葉の楽しさを感じながらいろいろな言葉遊びをする。
(事例1・2)
- ・人の話をしっかり聞き、思ったこと、考えたことを相手に分かるように話す。
(事例1・2)
- ・友達の思いを感じたり、受け止めたりしながら遊びを進めていく。(事例1・2)

5 環境構成のポイント

- ・幼児の興味、関心のある絵本を選んで保育室などに設置する。(事例1)
- ・なぞなぞ、しりとり、言葉集めなど、いろいろな言葉遊びを伝え、時にクラス全体で楽しむ時間を作る。(事例1、2)
- ・幼児が遊びの中で言葉に親しめるような、しりとり遊び、仲間集め遊び、文字遊びなど、環境を設定する。(事例2)
- ・幼児がじっくり遊びに取り組み、友達との関わりを楽しめる空間や時間を確保する。
(事例1、2)

6 活動の展開と評価

(1) 事例1 今度は違うのを見つけよう(6月上旬)

絵本を見ながら「かっぱかっぱ…ぱかっぱかっ…」と言い合っている二人。

A児「ぱかっぱかっ、かっぱが馬に変身するんだよね。」

B児「時計は何に変身するか知ってる？」

C児「とけいとけい…けいと？毛糸だ。」

幼児が繰り返し読んでいたので、クラスで集まった時に読み聞かせを行った。「たけがどうくつにはいると…」「たけたけ…けたけた～。」「りんごは、りんごりんご…ごりん。」「ごりん？」「次は何が出てくるのかな？」と興味津々で、言葉を繰り返

し言いながら絵本を楽しんでいた。

食後、C児が「スープスープ…ぷすーぷすーって面白い！くちはちくちく、くちはちくちく。」と

印象に残った場面を口ずさんでいた。

A児「いすは…いすいす…すいすい スイスイ…
プールだ。」

B児「じゃあ、たいは？ たいたい…いたいた
痛いよう。」

C児「痛い？いたいたって、『居た』のことだと思った。」

教師「そうか、先生は『板』かなって思ったよ。」

A児「へえ、みんな違ったんだね。」

教師「そうだね、いろいろな『いた』があるんだね。」

その様子を見て、周りにいた幼児も集まり、D児が「ぞうきんぞうきん…きんぞう？人の名前みたいだね。」と言うと、「ぞうきんキンキン！」とE児。F児は「ぞうきんキンキンか～、いすはスイスイ、すいかもスイスイ。」と音の響きに関心が向いた。F児に刺激を受け、「りんごはリンリン。」「うどんはドンドン。」「カーテン、テンテン。」「ぶらんこランラン。」などたくさんの言葉が聞かれ、「今度は違うのを見つけよう！」と言葉遊びが続いた。



○事例1に対する評価

(環境の構成)

5歳児になると、言葉を繰り返していくことで違う意味の言葉に変化する、という遊びを楽しめるようになる。クラス全員で同じ絵本を見る機会を作ったり、発達に応じた絵本、幼児が関心をもっている絵本を保育室のコーナーに用意したりし、いつでも見られる環境を設定した。そのことで、絵本の面白さを友達と共有し、一つの言葉からイメージを膨らませ、表現したり、想像したりする楽しさを感じることに繋がった。

(幼児理解、教師の援助)

幼児は、言葉を繰り返して違う言葉になることを見つけることだけでなく、『すいすい』や『りんりん』など、意味はないが音の響きの面白さに気付き、考え始めた。また、同じ音でも、意味が違うものがあることに気付く姿もあった。自分で言葉を見つけて友達に伝えている幼児、友達の言葉を聞いて、同じように声に出している幼児など、様々だが、一人一人の表現を認め、友達の言葉に気付けるように関わっていくことで、いろいろな言葉に触れることができた。

(家庭との連携)

園で読んだ絵本、幼児が興味をもち好んで見ている絵本をクラス便りなどで紹介していくことで、家庭でも内容について話したり、親子で楽しさを共有したりすることができた。また、保護者の方も絵本の大切さを感じ、いろいろな絵本に関心をもつようになり、図書館に行って絵本を借りたり、子供が寝る前に読み聞かせをしたりなど、親子で絵本に触れる機会が増えた。

(2) 事例2 ドキドキでウキウキだね (1月中旬)

ひらがなの文字をパネル布に貼り、初めに『あ』のつく言葉を順番に言っていた。
「あひる」「あいす」「あめ」「あまもり」「あさがお」「あじさい」「あり」「アルパカ」
D児「いっぱいあるね、じゃあ、次は…『ど』にしよう！どんぶり。」

E児「どんぐり。」

F児「ドア、次はGちゃんの番だよ。」

G児「ど？」

F児「ヒントね、ほら穴が開いていて丸くて食べられる物。」

G児「あ、ドーナツかな。」

F児「大正解。もうないかな。」

D児「まだあるよ。ドキドキ！」

F児「ドキドキ…か、『ど』がつくね。」

D児「昨日の夜、急に電気が消えちゃったからドキドキしたんだ。」

E児「私も怖い夢見たときにドキドキした。」

教師「ドキドキすることってあるよね。ドキドキを見つけるのも面白いね。」

降園前に4人の話をし、「どんな時にドキドキする？」と投げかけた。

H児「病院で注射をするのかな？って思う時。」

I児「誕生会の日、みんなの前で名前を言う時、ちょっとドキドキした。」

J児「サンタさん、プレゼント持ってきてくれるかな？ってドキドキした。」

教師「なるほど、心配な時じゃなくて、楽しみな時にもドキドキするよね。」

K児「僕は、ドッジボールでL君がボールを持った時。L君強いから。」

F児「わたしは運動会かな？Gちゃんにバトン渡したよね。」

G児「私も！リレーの時、抜かされちゃうかなってドキドキした。」

その言葉に、他の幼児も「うんうん、リレーはドキドキだったよね。」と共感した。

「でもさ、勝てたからウキウキだったよね。」と言う

L児の言葉に「私も嬉しくてウキウキだったかな。」

「僕は、ドキドキだな。」「そうそう、ドキドキでウキウキだね。」とみんなで運動会を振り返った。



○事例2に対する評価

(環境の構成)

文字環境の一つとして、ひらがなをパネル布に貼って遊べるように設定すると、幼児は文字を並べてしりとり遊びや、初めに○がつく言葉遊びをしていた。この時期、学校への関心も高まっていたので、壁につけて掲示すると、黒板に見立てて遊びが盛り上がった。また、廊下のスペースを利用したことで、年長だけでなくいろいろな学年の幼児が集まり、言葉の刺激を受けたり、年少・年中児に対して「これは『あ』だよ。」と教えたりして一緒に遊べる場となった。

(幼児理解、教師の援助)

G児は、思いを積極的に話すタイプではないが、運動会でドキドキした話をみ

んなが共感してくれたことで自分の話す言葉に自信をもち、堂々と話すことができた。

D児の「ドキドキ」という名詞ではない言葉に、周りの幼児は少し戸惑いを感じる部分もあったが、「電気が消えてドキドキした。」という体験を聞いて、自分のドキドキした思いを伝え合う姿につながった。幼児の『ドキドキした経験』を受け止め、『ドキドキする時はどんな時だろう』とクラス全体に投げかけたことで、自分なりに考えたり、友達と探そうとしたりして、いろいろな場面が出てきた。そして、心配する時だけでなく、楽しいことを期待する時にもドキドキするという気持ちの違いを感じることができた。

(家庭との連携)

子供たちの言葉のやりとりやつぶやきなどを、クラス便りに掲載し、思いや考えを自分の言葉で伝えることの大切さを知らせてきた。また、学級懇談会で「言葉に対する感覚を豊かにする」ことを話題に出し、簡単な単語のみで親子の会話をするのではなく、いろいろな言葉に触れながら会話が楽しめるように投げかけた。

保護者の方も、状況に応じた言葉を使ったり、正しい言葉で話したりするなど、『言葉』に対しての意識が変わってきた。

7 評価を踏まえた指導計画の改善

(1) 短期の指導計画の改善

教師がそれぞれの表現を受け止め、共感・共有すること、幼児の言葉をつなぎ、表現することの楽しさを味わえるように様々な言葉遊びを取り入れていく。また、幼児が日々の生活の中で聞き慣れない言葉を、意図的に発信していく。幼児が「どういう意味だろう」と不思議に思った言葉の意味を一緒に考えたり、状況に応じた正しい言葉遣いを伝えたりし、絵本や詩の中に出てくる多様な言葉を生活体験と結び付けられるようにしていく。

(2) 長期の指導計画の改善

教師が保育の中で言葉遊びを意図的・計画的に取り入れ、年齢に応じた言葉の獲得ができるような絵本・素話等の選定を再考していく。言葉に対する興味関心を高め、音の響きや面白さを知るきっかけとなった場面を一部の幼児だけでなく、クラス全体に広がるような機会を作っていく。また、耳からの情報だけでなく、文字を通して言葉の感覚を豊かにできるよう、黒板やカレンダーを活用したり、表現の楽しさ・面白さを味わえるような詩を幼児の目に触れやすい場に掲示したりしていく。